

学校資格を高め

1



大正10年に行われた作品展覧会。廃物利用のコーナー。即売も行われ、一般の参観者も多数来校した

「高等小学校の校舎も結構立派に再生されたねえ」

「おかげさまで……。校舎も三棟になりました。生徒も追々増えておりまして、これから一層世に役

立つ人を育てていきたいと願っています」

大正四（一九一五）年三月七日、安城裁縫女学校は華やかさに包まれていた。郡長、町長など地域の有力者、そして小学校長ら百三十名を招いて盛大に開校式を行っていたのだ。その席に安城町長の岡田菊次郎も招かれていた。

生徒数が五十名になったことで、大正三（一九一四）年三月には第三校舎を増築した。安城町長の岡田の尽力によって、元安城高等小学校の校舎を買い受けて移築したものであった。その一年前の町長の厚情に、だいたい開校式の間であらためて感謝するのだった。

生徒数は大正三年度末には百名近くにまでなっていた。（『碧海郡誌』には大正三年度末で、卒業生十五名、生徒数九十六名、学級数五と記録されている）

ここにいたって、だいたいようやく心の余裕が出てきた。開校以来丸三年が経過した。この間、第二・第三というあいつぐ校舎増築のため、学校経営の面においては苦勞が伴ったが、目標の一つともしていた裁縫科教員の検定試験にも合格者を出すようになり、苦しいながらも学校の運営に将来への希望と自信が芽生えてきた。

—ここであらためて世間にお披露目をし、生徒たちの日頃の学習成果を見ていただくこう…。

これまで学校経営と教授に追われてなかなか実行できなかった開校式を挙げよう、という思いになったのだった。

開校式の翌日からは、開校記念の裁縫科展覧会を校内で三日間開き、一般にも公開して多くの見学者を迎えた。全生徒が色々な作品を作って出品したが、小物入れ・財布・手さげ袋などの袋物は即売されて、好評を受けた。裁縫女学校としての存在感と実力が公に認められた催しでもあった。

2

だいは、裁縫女学校の教育において、裁縫を通して、実力をもつ家庭婦人の育成を図るとともに、裁縫科の教員の養成にも力を入れた。女性の地位向上と生活能力の開発のためには、小学



大正6年の本科卒業生（前列右から2人目・寺部だい校長、3人目・榊原きそ、円内中央・寺部三蔵校主）

校教員の養成を目指すことが最も適切なすべだと考えていたからだった。

そのため、だいは母校・東京裁縫女学校から師範科卒業生の榊原きそを迎え、裁縫・珠算を担当してもらい、小学校教員の養成に力を入れた。

小学校裁縫専科正教員の検定試験は、小学校に奉職中の助教員でも多くの不合格者を出すという難しいレベルのものであったが、努力の成果は徐々に上がり、検定試験に合格するものは毎年数名ずつにのぼるようになった。

そうした中、だいは、その「自立路線」を強調して、「裁縫によって身を立て、小学校教員を職業とする人物を養成することを目指す学校」という特色を校名に打ち出すことを考えた。

その実行は大正六（一九一七）年四月。校名を「安城裁縫女学校」から「安城女子職業学校」に変更した。

当時、職業能力を身につけるための実業学校には商業学校、工業学校、農学校、師範学校などがあったが、〃職業学校〃と名づけた学校は少なく、奇抜な感がもたれた。

だが、だいは、この頃、女子の実業教育の必要が叫ばれて各地に設立され始めた実業補習学校に対する意識があった。

実業補習学校は、〃役に立つ主婦〃、家業（主として農業）を

助ける婦人〳の養成が目的であった。これに対し、だいは経済的にも独立した婦人の養成、すなわち〳職業婦人〳の育成を目指していた。

そこで、だいは、熟慮した後、実業補習学校と一線を画すために、「女子職業学校」を校名に採り入れたのだった。

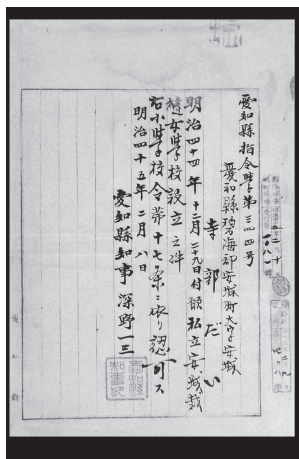
そして、校名ばかりでなく、検定試験に合格できるだけの高い技術と知識を身につけるために「師範科」を設け、その目標をはっきり打ち出した。

だが、校名変更によつて気概も新たに出発すると間もなく、翌七（一九一八）年、思いがけない危機に見舞われた。

3

この頃、碧海郡内の各地に実業補習学校の設立が目立ってきていたが、安城町でも町内の各小学校に実業補習学校が併設された。入学資格は尋常小学校六年卒業。課程は修業年限三年の本科と夜間部。学科目は修身、国語、算術、農業、家事、裁縫。

これが安城女子職業学校に大きなショックを与えた。それは安城女子職業学校に類似し、競合は避けられないものだった。しかも、町立とあつて町の在住者については無月謝とされたからであった。全校生徒の六〳七割までが町内の高等小学校卒業者だった安城女子職業学校がこの実業補習学校



大正8年、甲種（中等程度）実業学校として新発足。寺部だいには新たに愛知県教員認可証が授与される

出現によって受ける影響はきわめて大きく、その年（大正七年）四月、町内からの入学生は激減してしまった。これまでにない深刻な危機に陥った。

さらに時流も追い討ちをかけた。

第一次世界大戦によるインフレーションで物価は暴騰し、ついに象徴的な出来事として、七月には、富山県魚津町で米価格急騰にともなう暴動が発生、全国に米騒動として波及した。

こうした異常経済に学校経営も悩みが大きかった。

管理費や諸経費がどんどん上昇していく。どうしたらよいか。月謝を上げるか。しかし、ここでその挙に出たら、更なる生徒減は目に見えている。実業補習学校の設立で受けた痛手をより深めることになる。出来ることなら、この方法は避けたい…。

しかし、厳しい事態を切り抜けるには結局月謝値上げしか方策はなかった。これまでの月額五十銭を二円に大幅にアップした。

だが、これで事を済ませているわけにはいかない。

「職業学校が実業補習学校とは違うという、差別」を打ち出して、「安城女子職業学校」の教育の特色を浮かび上がらせなければ…。

何らかの新しい手を打つことがなんとしても必

要であつた。そして行き着いたのは、

―学校資格を高めて、月謝に見合うよう教育の質を高めよう。

図つたのは、〃中等教育機関〃としての昇格であつた。

4

当時は尋常小学校六年の義務教育を終えると、進学希望者は、その上は高等小学校、中学校、高等女学校、実業学校等に分かれて進学した。

ほぼ現在の中学校・高等学校にあたる戦前の中等教育機関は、女子の場合は、高等女学校令による高等女学校、高等女学校令改正による実科高等女学校、実業学校令による実業補習学校、そして小学校令による「其ノ他小学校ニ類スル各種学校」と分かれていた。裁縫女学校は高等女学校や師範学校と比べれば、制度上の限定が小さい各種学校にあたつた。この種の学校の設立は、府県知事の認可を要するものの、認可条件で求められるものは教員の資格が主で施設・設備等に関しては比較的緩和であり、学科課程等も小学校令に定める小学校の補習科に類似して規制が少ない。それゆえだいままた、裁縫塾の延長として裁縫女学校を創るにあたつて、教員、施設規模から小学校令に基づく「各種学校」としてスタートしたのだつた。

だが、危機に追い込まれた今、学校の資格を上げ、教育内容のグレードアップを図って生き抜く



安城・朝日町通りから見た校舎・講堂

ことが必要だった。

だいは、小学校令による各種学校から実業学校令による実業学校への昇格―それも「甲種中等程度実業学校」への昇格を目指すことにした。

それは、危機をチャンスとしてさらに高きを目指す前向きな姿勢であり、起死回生を図った発想の転換だった。

『起死回生』のためとあれば、ただちに手を打つ必要があった。

十一月五日、その認可申請書を提出した。

ただし、認可を得るには設置基準を充足させなければならない。学校資格を高めるには、それだけ内実も高める必要があった。

さっそく土地百坪（三百三十平方メートル）を購入して校地を拡張、年内のうちにあわただしく第四校舎（一部二階建て、四十坪（百三十平方メートル））、校舎・講堂（二階建て、四十八坪（百六十平方メートル））を増築して、甲種実業学校にふさわしい施設充実を図った。

認可があったのは、翌大正八（一九一九）年二月二十一日。かくして四月一日を期して甲種中等程度実業学校として再発足したのだった。

世には捨てる神もあれば、拾う神もある。

安城女子職業学校が町内からの入学応募が激減する一方で、安城女子職業学校が自校教育を代表するアイテムとした「師範科」が脚光を浴び、入学生が急増してきたのだった。しかも、それは安城町、碧海郡の域を越えた広い地域からの応募が目立っていた。

その人気は「クチコミ」によるが大きかった。キーマンは卒業生だった。

卒業生たちは、徹底した指導により優れた裁縫技術を身につけて巣立った。検定試験に合格し、裁縫科教員として各地の小学校に赴任した卒業生も多くあった。その卒業生たちの活躍と実績が一般に広く認められてきていた。そして、そうした卒業生たちが自分の受けた母校の教育の素晴らしさ、充実ぶりを言い広め、自分の教え子たちに「安城女子職業学校」への入学を薦めた。この「クチコミ」が入学者増をもたらしていった重要な要因であった。

甲種中等程度実業学校に昇格すると共に、教員養成を中心とする安城女子職業学校の教育は、こうしてしだいに社会的に認められ、



裁縫授業（大正後期）

学校経営も軌道に乗ってきた。

その確固とした評価は、やがて同じような危機が新たに再発した時にも、その影響が最小限に食い止められることになったのである。大正十（一九二一）年四月のことだ。安城町が今度は町立の高等女学校（現愛知県立安城高等学校）を設立した。これで再び安城女子職業学校の安寧が脅かされることになった。

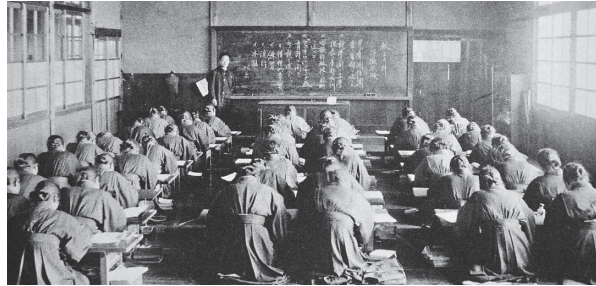
「教養ある婦人、働く婦人、健康な婦人を目標に、農村婦人の育成を目的とする」というのが、同校の教育目標。甲種中等程度実業学校の安城女子職業学校とは教育目的が異なるものだった。しかし、一般の町民にはそうした違いは理解されにくく、この設立によって、安城町内から安城女子職業学校への入学生はさらに激減した。『官尊民卑』の風潮も反映していた。

だが、安城女子職業学校はもう動ずることはなかった。

6

安城女子職業学校における入学志願状況は、安城町に実業補習学校が設置された頃から数年のうちに大きく様変わりしていた。

町に高等女学校が出来たことで、かつて実業補習学校の時と同じように、町内からの入学生はまたまた大きく減少した。だが、入学生総数は反して増加したのである。それは町外の、碧海郡ある



裁縫師範科の教科模擬試験（昭和5年頃）

いはそれより遠い各地からの応募者が地元の入学生が目減りをカバーしたのだった。

ここ数年のうちに小学校へ奉職した卒業生の活躍が次第に認められ始め、その卒業生の吹聴する「クチコミ情報」も信頼性を帯びて伝わるようになったこと、そして、学校も師範科を設けて教員養成を中心とする教育に力を入れ、「自立する実力ある職業婦人」を育てるという「職業学校」としての特色を打ち出していったからであった。そのため、師範科への編入も多く見られたのだった。

＊

安城女子職業学校では、生徒たちの熱心な要望に応えて、ひたすら裁縫科正教員の資格を取得させることに努めた。

大正十一（一九二二）年には、師範科を裁縫師範科と改称して目的性をよりはっきり打ち出すとともに、指導も今まで以上に厳しくした。

一年生終了で准教員の資格を取得し、二年生の卒業時で裁縫科正教員の検定が受けられるよう目指した。したがって二年生では、検定試験科目である裁縫（理論と実地）を主とした教科課程を組み、期末考査もつねに検定を意識した出題をして受験の訓練をした。卒業試験ははっきりと検定試験に準じた模擬テストの性格をもたせた。



雑誌『主婦の友』9月号。寺部だいの半生を紹介

こうして、すべてにおいて「実戦」的な対応に努めていったが、その教導の成果は見事に現れる。

7

大正十二（一九二三）年三月の検定試験には裁縫師範科卒業生の大部分がパスし、二十三名が小
学校専科（裁縫）正教員免許状を授与される快挙を見せた。

また、この目覚しい成果が高い評価を呼び、同校にこの上ない特典が与えられることになった。

同校の裁縫師範科を卒業して半年間教員の職に就いた者は、申請す
れば無試験で小学校専科（裁縫）正教員の資格が与えられることにな
ったのである。また、中等教員の検定受験資格が与えられもした。

「この指定を受けた学校は、愛知県内では二校だけ…」

もう一校は名古屋の中京裁縫女学校（現学校法人至学館）であつ
た。その指定の価値の程が知られた。今まで苦心・努力してきたこ
とが徒労ではなく、間違っただけではなかったことも確信した。

卒業生の活躍が目立ち、教員無試験検定指定校となると、学校の
評価はいよいよ高まっていく。県内外からの入学希望者が急増、裁
縫師範科二年生への編入希望者も増える…。

学校にとって極めていい連鎖サイクルが出来た感じだったが、こうした流れをさらに強める出来事が起きた。

*

「あんだ、今売ってる『主婦之友』、見た？」

「いいや、何か書いたるの？」

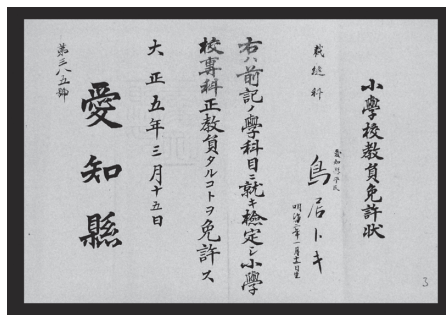
「安城女子職業学校のだいさんのことが載つとるよお」

「へえー、どんなふうに書いたるの？」

大正十三（一九二四）年夏八月、雑誌『主婦之友』九月号が発売された。

『主婦之友』は大正六（一九一七）年二月に主婦向けに生活情報や教養を提供するために創刊された婦人総合雑誌だったが、健康や家計、料理などの実用記事のほか、女性の社会進出といった話題を取り上げるなど、幅広い内容で女性の生き方をリードし、『婦人倶楽部』などとともに代表的な婦人雑誌として人気を集めていた。

九月号は一年前の関東大震災を回顧する「大震災記念号」でもあったが、その号に、思いがけない、安城の学校経営者の生き様が六ページにわたって紹介されていたのだった。



愛知県小学校教員免許状（小学校専科〈裁縫科〉
正教員として免許された卒業生・鳥居トキの免
許状）

それは、いささかセンセーショナルなタイトルでもあった。

「私生児に生れて女学校長になる迄

―蔑みと嘲りとを鞭として―

今でいう『シングル・マザー』の子として生を享けたその生い立ちから始まって、苦勞の末、現

在の安城女子職業学校を築き上げるまでのだいの半生が同雑誌
記者のルポ記事としてまとめられたものだった。

恵まれない運命に屈せず、自立を求めて、東京での壮絶な苦
学の様子、経済的な苦境を乗り越えながら果たした学校経営、
そしてその学校の内容、教育方針などが紹介されているのだっ
た。

だが、この記事は、読者には単に『サクセス・ストーリー』
としてではなく、自らの力で生き抜いていく人生設計の糧とし
て提供されていた。

「将来の婦人は実的な力の持ち主でなければならない」

だいは、この信念のもと、自分の学校にて一年で尋常小学校准教員、二年で小学校裁縫専科正教員、さらに尋常小学校正教員の資格をとらせることについて、記者に縷々語った。記者も、だいの言葉をしっかりとらえて、ここにそのままを記した。

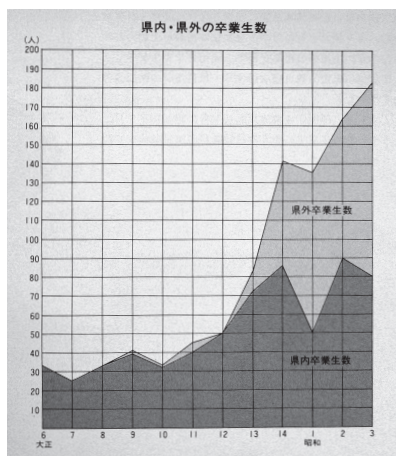
「そうすれば、家庭の事情などで中途退学しても、それまでの勉強が役に立ちます。こうして資格を得させておけば、万一の場合、例えば夫に死別した場合などにも、見苦しく狂い迷うようなことはありません。財産などは決して最後の保証にはなるものではありません。結局婦人も、自分一人の力を養い、しっかりと実力の上に生活の基礎をおくべきです。私はすべての生徒を働ける婦人に育てます。働ける婦人でなければ、決して理想の主婦ではありませんから」

自らの体験に基づいて培っただいの女性自立論がそこに吐露されていた。それだけに、不遇にあえぐ人、逆境から立ち上がろうとする人、心傷ついた人、こうした人々を、励まし、勇気づけるものであり、なかでも、若い女性やその親たちの心を強くとらえたのだった。

だが、反響はさらに輪を広げる。

9

『主婦之友』での掲載が口火となって、他の婦人雑誌も相次いで同様に特集で取り上げた。おかげで、だいの、安城女子職業学校は、思いもかけない〳〵時の人〳〵時の学校〳〵になってしまった。



安城女子職業学校の県内・県外の卒業生数の推移

その注目の影響は、たちまち翌年の志願者殺到となって現れた。大正十四（一九二五）年四月には、マスコミの報道でその存在を知った多くの入学希望者が集まったのである。それまでのクチコミがマスコミに代わったといってもよかった。

その激増ぶりを卒業記録で見ると、大正十三年度（十四年三月）に八十二名だった卒業生数が十四年度（十五年三月）には百四十二名と倍増近くになっている。

しかも、およそ四割（三八・七％）は県外の出身者であり、その範囲も全国各地に、北は北海道から南は熊本県まで二十二道府県に及んでいた。安城女子職業学校はマスコミの紹介によって、全国各地から応募があり、まさに「全国区」の有名校になったのだった。

『主婦之友』に載った記事に感動し、自立の道を求めた彼女らは、その多くが裁縫師範科及びこの年新設の高等師範科（一部、二部）への入学を希望した。

だいは、これまでの尋常小学校・高等小学校卒業者を入学資格とした本科、専修科、裁縫師範科に加えて、グレードの高い修業年限一年の「高等師範科」（二部・二部）をこの年から新たに設けていた。

「二部」は高等女学校卒業を入学資格として尋常小学校本科正教員資格を取得するもので、「二部」はそ

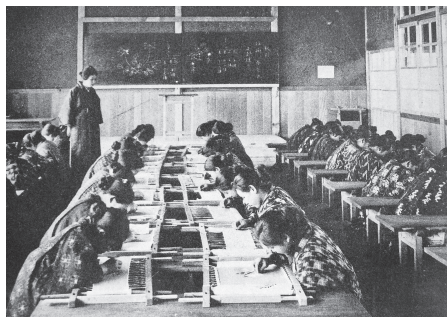
の他の女学校卒業を入学資格として裁縫科専科正教員資格を取得するものである。

この新しい学科を創ったのには、だいの持ち前の敏感な時代推察が働いていた。第一次世界大戦の戦後の反動不況から景気が悪化、経済の低成長が続いて、農村各地では小作争議も多発した。こうした農村不況にとくに女子の中等学校進学にかけりが見られはじめたこと、そしてまた、近在の安城高等女学校でこの年初めて卒業生を出すことから、そうした「受け皿」として、新しい学科コースを考えたのであった。

10

新しく設けられた高等師範科には、だいのある思いがことさら凝縮されていた。

入学資格を高等女学校卒業とするほかに、もう一つの特徴的なことは、年齢の制限をつけなかったことであつた。そのため、高等女学校を卒業してのち、生き方を模索していた者などが教員の資格取得を目指して、全国各地から集まつた。したがって、学ぶ者の年齢差も大きかった。そうした高等師範科の後年の応募者の中には、一家の再興を図って、夫と三人の子どもを郷里、長野県・諏訪に残してここに学び、夏休み中も帰省を惜しんで勉強にいそしんだ三十九歳の人妻もいたりした。だいは、そうした窮状を乗り越えようと努める学生を見るにつけ、わが身の過去をだぶらせて、この「高等師範科」に、さらなる思いをふくらませたのだった。



刺しゅう授業（大正後期）

半年後の十月、だいは同じく高女卒を入学資格として、修業年限二カ年の裁縫科中等教員養成部（家政高等師範科）の設置認可をうけた。中等教員養成を意図したのである。

と同時に、この頃は、入学生が激増してそれを受け入れるための教室増設や、県内外の遠隔地からの入学者が多くいることから寄宿舎の確保にも大童^{わらわ}とならざるを得なかった。応急にこの事に当たりながら、こうした動きの中、

—ここではもう限界が来る。この際、〝新天地〟を目指し、そこで中等教員を養成する、学校のレベルも上げたものを創りたい…。

だいには、こんな〝野望〟のような思いが頭をかすめた。

はじめはふとしたひらめきであったが、それはやがて発意となり、構想として計画されていった。専門学校の設立を図ろうとしたのである。

今を踏み台として、さらに一步高みに上がる。次々と学科の昇段を考え出していくだいは、学校経営に限っては〝貪欲〟^{どんぐ}なまでにひたむきだった。

だが、専門学校設置の道のりは、果たして険しい難路だった。それは、だいの想像を越えていた…。